

このバラとともに、平和への祈りが届きますように――

1954年、ビキニ環礁での水爆実験により、被ばくした焼津市のマグロ漁船「第五福竜丸」。その乗組員の久保山愛吉さんが生前、自宅の庭に植えたバラから分けられた挿し木が今年、市内で初めて花を咲かせました。「愛吉・すずのばら」と呼ばれるこのバラを世話する粕谷さんは、美しい花とともに、平和の大切さを伝えていきます。

【バラの里帰り】

愛吉さんの妻、すずさんは、夫の残したバラを生涯大切に育てていました。1988年、高知県「幡多高校生ゼミナール」の学生らが、焼津市を訪れた際、バラを分けてほしいと彼女に要望。バラは翌年、高知県に渡り約30年間、各地で大切に育てられました。すずさんを尊敬する粕谷さんは、2人の古里である静岡で

もう一度花を育てたいと考え、行動を起こします。



「被ばくで早くに夫を亡くした悲しみを、残された3人の娘とともに乗り越えようと、強く生きたすずさんの姿勢に感銘を受けました。彼女が生前、大切に育てたバラを、古里の静岡でも育てたい。そ

親大会」に、県の実行委員長として出席。歓迎の言葉の中で、幡多ゼミの卒業生とその子どもから、バラの挿し木が贈られたことを報告しました。「すずさんは、第1回大会に出席し、体験を語ったそうで



「愛吉・すずのばら」を育てる 粕谷たか子さん(東町)

の思いから、挿し木を譲ってほしいと、高知県に住む所有者の一人に連絡したんです」

「思いは世代を超えて」
粕谷さんは昨年8月、静岡市で開催された「第65回日本母

【つながりはバラとともに】
バラを受け取り、すぐさま自宅の畑に植栽した粕谷さん。健やかに育つよう、毎日欠かさず世話をしながら、より多くの人にバラの存在と平和の尊さを伝えます。

「冬の時期は、寒さで枯れてしまわないか心配でしたが、今年の4月頃から、ぐんぐん成長し始め、きれいなピンク色の花を咲かせました。バラを頂く中でも、多くの人と関わりを各地へ届けていきたいです。バラに関する問い合わせも、徐々に増えていますよ。今度私が、挿し木を分けられるほど、バラを大きくできたらうれしいですね」
今年、4つの花が寄り添うように優しく咲いた、愛吉・すずのばら。「まるですずさんと3人の娘さんが、寄り添っているようね」と微笑む粕谷さんは、これからも祈りの輪を広げます。



第65回日本母親大会のパンフレットを広げる粕谷さん

島田 Story 人田

Shimadajin File #102